

「感染症流行なら致命的」

能登で活動 磐田の医師ら

能登半島地震を受け、県の災害派遣医療チーム（DMAT）の一員として活動した磐田市立総合病院の医師らが9日、同病院で被災地の現状を報告した。

一谷眞一医師（40）は「避難所は高齢者がほとんど。感染症が流行すれば致命的だ」と訴えた。

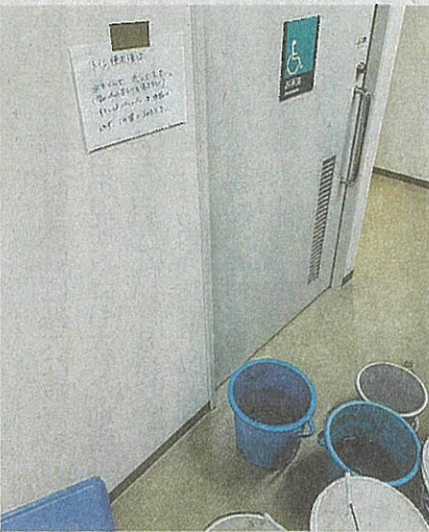
一谷医師と薬剤師、看護師の計4人が地震発生翌日の2日に出発。公立能登総合病院（石川県七尾市）を活動拠点として現地の各病院が必要とする薬品などの把握に努めたほか、七尾市内の避難所の調査に当たった。6日まで活動した。

劣悪な衛生環境を報告

一谷医師は、避難所ではトイレは排せつ物があふれ、能登総合病院では貯水槽が壊れ雨水をためて流していたことを説明。避難所にいる人の7割超が高齢者だったとし「密で、水もなく手洗いすら困難。新型コロナウイルスやインフルエンザが流行すれば致命的になる」と強く懸念した。

一谷医師は「まずアルコール消毒、マスク着用が必要」と指摘し「感染を判定する陽性キット、治療薬も必要だ」と医療物資の必要性にも触れた。

（勝間田秀樹）



①公立能登総合病院の敷地もひび割れるなど影響が出ている ②トイレで流すため雨水をバケツにためて活用している公立能登総合病院（いずれも石川県七尾市で（磐田市立総合病院提供））



被災地の現状を報告するDMAT隊員（左列）ら19日、磐田市立総合病院で